



APAY eNews

翻訳: 永岡美咲 (日本Y M C A同盟)

災害対策ワークショップ

2012年4月30日~5月2日

アジア・太平洋Y M C A同盟 (APAY) およびYケア・インターナショナル共催の「災害対策ワークショップ」が、4月29日から5月3日まで、ミャンマー・ヤンゴンにて行われました。バングラデシュ、カンボジア、日本、インド、インドネシア、パキスタン、フィリピン、ミャンマー、スリランカ、タイの以上10か国のY M C Aから、27人が参加しました。Yケア・インターナショナルよりリズ・ハリソン氏、ジェン・ブラックウッド氏、ヤンゴンに拠点を置くチャーチ・ワールド・サービス (Church World Service: CWS) よりポーリー・ニューアル氏の3人がファシリテーターを務めました。災害の概念やターミノロジー (専門用語)、災害発生時の対応、Y M C Aがどのように災害に対応してきたか、Yケア・インターナショナルへの要請プロセス、緊急時のニーズの把握、Y M C A緊急時協働協定 (Y M C A Emergency Coordination Protocol)、について学びのセッションを持ちました。また、参加者は、ある事例に則した、「緊急要請テンプレート」の使い方について学びました。インプットや講義のセッションの合間に、各Y M C Aによる実際の経験に関する報告や共有が行われたことは、議論を引き出すうえで、経験から学びを得るといった重要なプログラムでした。また、災害時対応プログラムやプロジェクトをどのように提案するか学ぶために、「緊急要請テンプレート」の最終版を作成しました。学びのプロセスでは、批評やフィードバックもなされました。他には、規範と説明責任、災害予防計画、災害リスク軽減、兵庫行動枠組、アジア・太平洋地域におけるCWSの災害リスク軽減プロジェクトや、APAYの災害リスク軽減プログラムへの見方・取り組みとそれがどのようにY M C Aの働きとして組み込まれているかについてでした。



ワークショップ後に寄せられた意見は以下のとおりです。

1. Yケア・インターナショナルや各国Y M C A同盟との協議のうえ方針ガイドラインを策定し、各国Y M C A、各国レベルの組織委員会を組織すること。しかしながら、各Y M C Aレベルでのフォロー・アップや実行を確実にするために、APAYは各国Y M C A同盟と密接に関わりながら協働する必要がある。
2. 常議員を巻き込み、研修を行う。ボランティアやスタッフがトレーニングを受けても、意思決定を行う人が関与せず、また災害リスク軽減プログラムについて何も知らず、この考え方を支持しないのであれば、この方法は支持やリソースを欠くため効果的ではない。
3. このワークショップに参加したスタッフやレイパーソンは、それぞれの国のY M C Aに帰ってから報告する義務があり、フォロー・アップのためのプランをつくる必要がある。
4. アジアの特徴に合わせるために、カリキュラムを改善、適応する必要がある。
5. より多くのY M C Aやコミュニティーを助言指導し、災害のリスクを軽減したというフィリピンのモデル・プログラムの事例に関する報告をより発展させる。
6. 今後、災害を受けてY M C Aを通してボランティアやスタッフを派遣する際、また特にワークキャンプを通じた支援の場合、ボランティアやスタッフは安全に関する研修を

受けておく必要があり、身体的にも精神的にも健康でなくてはならない。

7. 世界Y M C A同盟に対し、災害支援プログラムのための準備基金や緊急支援基金を用意することを嘆願する。

8. 他の団体が効果的に行っていることをY M C Aも同様に行うのではなく、Y M C Aの得意分野をさらに伸ばすとよい。Y M C Aが得意なのは、他の団体と協働しながら、団体として災害対応にあたることである。支援を行うことである。Y M C A単体には、物理的・財政的なインフラや、必要なサービスを提供するシステムが不十分である。

9. 同じようなワークショップで顔を合わせて対話をし、議論し、学びを得ることは、かけがえのないものである。したがって、今後、同様のプログラムを繰り返し行ってほしい。

APAY、Yケア・インターナショナルと参加者を代表して、ミャンマーY M C A同盟とヤンゴンY M C Aに、この会のホストを務め、APAY と共催してくださったことを感謝いたします。非常に実り多く、意義深い経験を得ることができました。

日本からは島田茂 日本Y M C A同盟総主事が参加しました。

環境保護(グリーン・アンバサダー)ワークショップ タイ・チェンマイにて開催

APAY グリーン・チーム主催のグリーン・アンバサダー研修会が、2012年5月21日～25日、タイのチェンマイで開催されました。オーストラリア、バングラデシュ、カンボジア、香港、インド、マカオ、フィリピン、シンガポール、スリランカ、タイより15人の参加がありました。

ワークショップは、チェンマイにあるパーヤップ大学のホープ・アントーン博士の開会礼拝から始まりました。彼女の奨励では、『創世記』にある万物の創世に関連して、私たちが地球や他の生物を掠奪するために、創世記をどれほど誤解し続けてきたかを説明しました。

APAY 副会長のパチャラワン・スリシラパナン博士は、

開幕スピーチにおいて、すべての参加者をチェンマイにお迎えすること、そして環境と生態を回復させるために、献身的になるよう求めました。

山田公平 APAY 総主事も挨拶の中で、環境的な計画を行うために、それぞれの所属Y M C Aにグリーン・チームを組織してほしいと訴えかけました。

チェンマイ大学教授のワサン・ジョンパクデー博士により、「地球温暖化と気候変動」という基調となる論文が紹介されました。地球温暖化に関する化学的な事実とデータ、また気候変動の原因が詳しく述べられました。また、環境を保護するために必要となる地球規模での努力目標が説明され、私たちが二酸化炭素の放出を削減するために、より多くの環境保護活動に関与することがどうすればできるのかについて説明されました。

Y M C Aの環境保護のために必要な対応について議論され、いくつかのY M C Aによる参考例となる試みがケース・スタディーとして紹介されました。チェンマイY M C Aのさまざまな取り組みのうち、特に環境保護プログラムとエネルギー学習センターやグリーン・ホテルに関して、パチャリン・アピファン氏と Chularat Phongtudsirikul 氏より説明がなされました。

香港中華Y M C Aのレイ・マン・ケイ氏が、「プロジェクト・ゼロ」という新たな環境保護プログラムについて参加者に紹介しました。このプログラムの目的は、ウーカイシャY M C Aユース・ビレッジの運営において、エネルギーを無駄にしない装置や再生可能なエネルギーを採用し、温室効果ガス排出ゼロのセンターへと変革するというものです。この計画は非常に大きなもので、実行するためには数百万ドルの投資が必要です。

香港Y M C Aのカイ・ユー・フォン氏からは有機栽培プロジェクトと社会企業についての試みが説明されました。オーストラリアY M C Aのコリン・ランビー氏からは、ピクトリア



州クイーンズクリフにある Wyuna キャンプを例としたケース・スタディーが紹介され、エネルギー効率のよい装置の採用と、雨水を利用した栽培に関する試みが参加者と共有されました。歓迎夕食会が22日にチェンマイYMCA主催で行われ、チェンマイYMCAの理事が紹介されました。環境保護活動の実践的な知識を身につけるためのフィールド・エクスポージャーが研修プログラムの一環として行われました。参加者はパチャリン・アピファン氏が率いるサオヒンYMCAの環境・エネルギー学習センターを訪れました。参加者は、さまざまなエネルギー資源について、またエネルギー消費におけるそれらのメリット、デメリットについて直接の体験をしました。また、ソーラー・エネルギーを利用して料理や発電を体験したりする機会も持ちました。



また、参加者は環境保護活動がさかんなプリンス・ローヤルズ・カレッジを訪れ、カレッジにおける環境と生態に対する配慮について学びました。

チェンマイYMCAによるバイオガス(メタンと二酸化炭素化合物)・プロジェクトも貴重な学びとなりました。チェンマイYMCAでは、地元の酪農家たちのバイオガス生成装置製作に対して支援することによって、化石燃料を節約し、家庭での料理等に使う燃料をつくることに貢献しています。

環境保護活動に関する簡単な展覧会が地元の3つの学校により、会場内に設置されました。参加者にとって、よい学びの経験となり、参加者がそれぞれの地元でも同

様に、環境保護に力を入れた学校を組織するきっかけをもたらすものとなるかもしれません。

コリン・ランビー氏は、エネルギーの単位に関する専門用語や、さまざまな発電装置の消費傾向について説明しました。また、エネルギーを節約するさまざまな装置やそのコスト・ベネフィットについて話し合いを行いました。重要なトピックは、それぞれのYMCAにおけるエネルギー消費と、私たちが放出する温室効果ガスの量についてでした。参加者は、ウェブサイト上の二酸化炭素計算機を使用しながら、YMCAの温室効果ガス排出量を測定するという、実用的な演習を行いました。

この研修は25日午後に終了しました。閉会式で参加者たちは、所属YMCAでグリーン・アンバサダー(緑の大使)として活躍し、環境保護活動を積極的に展開し、他のYMCA関係者を環境保護活動に巻き込み、より生活しやすい世界を作るよう託されました。また、修了証も授与されました。

最後のセッションでは、参加者たちにより、各YMCA、各国YMCAでグリーン・チームが結成される際の委任事項が策定されました。また、グリーン・チームの設置目的も定められました。各サブ・リージョンでの計画も策定され、この4年間で正式に具体化される予定です。

この研修プログラムは、パチャリン・アピファン氏、コリン・ランビー氏、ダンカン・チョウドリー氏が進行役を担いました。このプログラムの費用は、APAYグリーン・ファンドと一部ワイズメンズインターナショナルより拠出されたことをお知らせいたします。温かいご寄付に感謝申し上げます。チェンマイYMCAには、このプログラムのホストとしての惜しみない努力に感謝申し上げます。



総主事デスクより・・・災害対応への準備

アジア・太平洋 Y M C A 同盟総主事 山田公平

過去 10 年間(2001～2010)に世界中で起きた災害による死者の 62.48% がアジアにおける災害によるものでした。2011 年は、さらに大きな自然災害がアジア太平洋各地で起きました。ニュージーランドや日本の地震、スリランカ、フィリピン、タイでの洪水など、非常に規模の大きな災害が次々と起き、Y M C A がそれぞれの地で行った対応も物資支援から、長い期間に及ぶリハビリ的な活動までさまざま。そんな中で、今回 5 月にミャンマーで災害対応ワークショップが行われました。参加者は、バングラデシュ、インド、パキスタン、スリランカ、カンボジア、フィリピン、タイ、ミャンマーそして日本の 9 か国。この 5 年間で大きな災害に見舞われた国がほぼすべてそろって参加したことになります。これらの国は、これから数年のうちに再び大きな災害に見舞われる可能性を否定できません。災害にどう取り組むか、Y M C A の役割は何か、優先的に何をすべきかなど考える機会になりました。

過去の災害犠牲者を見てみると大きな傾向が見えてきます。1) 90%の死亡は、開発途上国で起きていること。たとえ、同じスケールの災害であっても、死者の数は、先進国と途上国とでは相当な違いがあります。2) 犠牲者の大半は、女性、子ども、そして高齢者であること。たとえば、2011年の日本での津波による死者の56%は65歳以上のお年寄りでした。3) 犠牲者の数が増える条件として、人口の急増地域、人口の都市化、貧困、森林伐採、そして地球の温暖化など挙げられること。

ワークショップでは、経験を分かち合い、ネットワークを強める必要性が確認されました。そうすることによって、いつおきるか分からない災害により効果的に対応するこ

とができます。特に次の点で配慮が必要です。

1 つ目は、災害後の募金だけではなく、災害にすぐ対応できる緊急資金が必要。

2 つ目は、Y M C A の強みは、子どもを預かること、ボランティアを募ること、特に緊急支援よりその後の被災地域のリハビリの期間中に必要とされるので。

3 つ目は、Y M C A は、行政と NGO などとの連携をはかること、必要なところにボランティアを派遣することといったことに力が発揮できるのではないか。

最後に、災害対応と同様、災害による犠牲を最小限にいとめるための方策を考え工夫する必要があるということ。

このワークショップの結論として、これらの専門性を高め、次なる災害に対応できるため、さらなる研修とネットワークの必要性が確認されました。

PSG 対象国東ティモール訪問の報告

アジア・太平洋 Y M C A 同盟総主事 山田公平

パートナーズ・サポート・グループ(PSG)会議が 5 月 26 日～30 日まで東ティモールのディリで開催されました。韓国および APAY の代表団と地元 Y の委員、スタッフが出席しました。日本とオーストラリアからの代表は出席できませんでした。

東ティモール Y M C A のオラシオ・メンデス総主事が東ティモール Y の現状について説明しました。首都のディリでは、地元コミュニティーのユースや子ども向けのコンピューターのクラス、子ども英語、絵画、音楽と図書館がうまく機能しています。サッカーチームは強く、21 歳以下のメンバーが 100 人以上おり、ナショナル・チームのメンバーに選ばれた選手もいます。あちこちの通りや公園で子どもやユースたちが裸足でサッカーをする様子が見られたことから、私たちは、東ティモールではサッカーがキーとなるプログラムとなりうると話し合いました。サッカーは世界的なスポーツで、みんなが好きなスポーツでもあります。私たちは、サッカー大会を 2013 年 8 月 20 日～30 日に開

催することを決定しました。これは、各国Y M C Aの小学5～6年生対象のものです。このプログラムでは試合、子どもたちやユース、マネジャーのための特別学校を5日間かけて行います。

私は、東ティモールY M C Aが韓国Y M C Aとの協働でフェアトレード・コーヒーを栽培している、遠隔地を訪ねることができました。そこには、RotutuとCablagiという2つのコミュニティに500家族(コーヒー農家)がいます。このプロジェクトは、7年前に始められました。フェアトレードのためのコーヒーを輸出するだけでなく、韓国Y M C Aは学校建設、医療サービスの提供、電気のないところにソーラーパワーを設置するなどの援助を行いました。コミュニティとの関係はとても安定しており、コミュニティの人々は村を越えてY M C Aのことを信頼しています。韓国のY M C Aは、このコーヒープロジェクトとRotutuやCablagiという遠隔地の生活を発展させるため、いろいろな資源を用いています。ソーラーパネルや、移動式診療所、コーヒープロジェクト・センターや機械の購入に募金を用いてきました。韓国から、スタッフやボランティアを送り続けています。今でも、韓国のスタッフと2人のボランティアがいます。韓国のY M C Aは、コーヒーの皮を剥く方法や、よいコーヒー豆を選別する方法を教えました。その結果、より多くの収益を得ることができたのです。この収益から、Y M C Aは不作に備えて5%、さらにコミュニティのための公益として5%を蓄えることにしたのです。

結果的に、私のRotutu、Cablagi訪問は非常に興味深いものでした。道の状態の非常に悪いなか、山を越えるのに6時間近くかかりました。Same地域へのアクセスはより大変で、流れの急な2本の川を越えなければなりません。さらに、特に道の状態の悪い地域にアクセスするには、山道を2時間も歩かなければなりません。Rotutu地域は、自然が豊かで、人々も非常に自然に密接に暮らしています。韓国Y M C Aが、ソーラーシステムを取り入れるまで、電気もありませんでした。村にないものを買うために、2時間以上も歩いて買い物に行く必要がありました。人々は、一日中コーヒー豆をバッグの中に収穫します。長い距離を、男性、女性、お年寄りや子どもでさえ、

肩や頭にコーヒー豆の入ったかばんを担ぎます。彼らは家族のために畑で一日中働きます。コーヒー豆1kgで、約35～40セントの稼ぎとなります。自然の中で平和に、神様とともに生活しているのだと感じました。Rotutuの生活はとても興味深いものでした。

***日本からは、全国より寄せられた募金より、東ティモールのPSG支援として2011～2012年度に各1万ドルを送金しています。**

インドネシアY M C A、スラバヤY M C A 視察訪問報告

APAYでは、ある特定の国のY M C A同盟や地域のY M C Aの運動やミッションを強化することを戦略計画の一部と位置づけており、パートナーズ・サポート・グループ(PSG)とともにPSGミーティングで



承認された内容を実行するために、各国Y M C A同盟と協働しています。インドネシアY M C Aを支援する努力の一環として、現在はスラバヤY M C Aに焦点を当てながら、スラバヤY M C AおよびインドネシアY M C A同盟と繰り返し会議や諮問を行っています。特別プロジェクトのための職員やスタッフのアシスタントを派遣することによって、ゆっくりではあるものの顕著な進展がありました。

幼稚園および他のプログラムの運営と管理が、最終的にスラバヤY M C Aの理事およびスタッフに移譲されてから、新たなリーダーシップが結成されたことや、ローカルY M C A事務局が再建されたことによって、徐々に変化が起こっているように見受けられます。5月21日から31日までスラバヤY M C Aを再訪し、ミッションの分かりやすさ、組織としてのたくましさ、および活動基盤としての社会的に妥当なプログラム運営といった、運動強化に関する3本の柱について、インドネシア同盟とスラバヤY M C Aのスタッフが理解を深める機会を持ちました。今回の訪問により、

スラバヤ Y M C A における自分たちの活動を成功が導かれているかをはかる手段が提供されたこととなります。

ダイナミックで、活気があり、より団結して、より強固としたリーダーシップと組織の運営を目指す準備プロセスの一環として、諮問会議やミーティング、役員・職員対象のリーダーシップ研修が行われ、世界の他の国の Y M C A と連携した、一貫性のある組織として、Y M C A のよいイメージを取り戻しながら、コミュニティーと積極的にかかわり合い、会員・メンバーに対して社会的に妥当なプログラムやサービスの運営が行えるよう、支援をしました。



イメージの一新とメンバーシップ・キャンペーンのキックオフとして、また保護者たちが子どもを Y M C A の就学前教育プログラムに出して下さることを願って、3~4 歳、4~5 歳という 2

部門からなるぬり絵コンテストを含む、「オープン・ハウスとバザー」が開催されました。38 人の子どもたちが参加しました。ユース・ボランティアたちが地元の伝統的な歌を歌い、子どもたちやマスコットと一緒にゲームや楽しいアクティビティーを行ったので、このイベントはより色鮮やかなものになりました。同時に、女性たちのグループは、自分たちのプロジェクトの紹介を行いました。午前中には、来場者や参加者たちは食べ物のバザーを楽しみました。

この訪問では、今後 4 年間にユースたちをチェンジ・エージェントに変える APAY ユース・エンパワーメントに関するプログラムと、このような Y M C A



の世界規模のビジョンを達成するために、どのように各地の Y M C A が参画し、貢献できるかについて、情報交換も行われました。Y M C A の常議員であるユースの代表が出席し、彼にとってスラバヤのユースの連携を促すのに非常によい機会となりました。PSG が支援している Y M C A が主管となり、ホストをするというユース委員会から出されたアイデアを引き合いにしながら、スラバヤ Y M C A でワークキャンプを行うということも、話し合われました。

***日本からは、全国より寄せられた募金より、インドネシア PSG 支援として 2011~2012 年度に各 5 千ドルを、スラバヤ Y M C A 幼稚園支援として 2011 年度に 1 万ドルを、2012 年度に 5 千ドルを送金しています。**

平和学校 インドにて修了式

宗教間協力フォーラムと共催の 2012 年度の平和学校 (School of Peace : SOP) が、5 月 14 日に修了式を迎えました。12 か国から 4 つの宗教 (仏教、キリスト教、土着信仰、イスラム教) を信仰する 20 人が集い、2 月 1 日から

14 週間のプログラムに参加しました。アジア内のバングラデシュ、ビルマ、カンボジア、インドネシアのパプア州、ラオス、フィリピン、タイ、東ティモール、ベトナムからの参加者に加え、カナダ、イングランド、アメリカ合衆国から 3 人の女性が、インド・バンガロールのピスタールに集いました。今回初めて、アジア以外からの参加者を迎えました。

イングランドからの参加者レイチェル・ダイン (Rachel Dyne) は、ダーリントンにあるティーズ・バレー (Tees Valley) Y M C A のスタッフで、昨年 7 月にバングラデシュ Y M C A 同盟主催でダッカにて開催された、2 週間のミニ平和学校に参加したことがあります。北アメリカからの 2 人の参加者、カナダからの Mariam Leah Faith Sainnawp さんと、アメリカからの Erica Littlewolf さんはふたりともネイティブ・アメリカンであり、平和学校の参加者にとって新しい観点からの発言がもたらされました。

プログラムは「自分自身、他人、そしてコミュニティー」、
「開発における紛争や暴力」、そして最後の「自分自身の



Field visits—here to Hyderabad in April to learn about the past violence involving the city's Sikh community—and a session the SOP participants to find the voices of those who have experienced conflict.

変革と自分のコミュニティーの変革」という3つの単元に分けられました。

教室内でのカリキュラムに加え、参加者たちは数回のフィールド・エクスポージャーに出向き、インドにおいて周



辺化されてきた人々、タミルナドゥ州内の例えばカースト最下層におかれダーリットあるいは不可触賤民(アンタッチャブル)と呼ばれる人々の現実を目の当たりにしたほか、またインド国内の問題、例えばハイデラバードにおけるコミュニティー内の暴力、カルナータカ州コッパル地区の児童労働や児童結婚、ケーララ州のトライブの人々に関する問題について学びました。

平和学校が終わりに近づいた5月5日には「ブーミ・ハッパ(Bhoomi Habba, 地球祭り)」として知られる、インドや世界中で人権や人間としての尊厳を求める人々の「平和と公正の祭り」が開かれました。

2012年の平和学校修了にともない、APAYとアジア・キリスト教協議会の協働プログラムにはこれまで16か国から20歳~30歳の88人が参加したことになります。

地球市民育成トレーナーズ・トレーニング 2012年8月 スリランカ

アジア・太平洋Y M C A同盟は、4回目となる地球市民育成プロジェクト トレーナーズ・トレーニングを開催します。スリランカY M C A同盟の50周年記念行事とあわせ、8月7日~12日に開催されます。

この研修は、それぞれのY M C Aで地球市民育成に関わる若いスタッフやボランティアたちのためのものです。5

日間のプログラムでは、地球市民となるために必要となる、適切な知識、スキル、行動のしかたを身につけるための学びが行われます。各国の「ユース代表(Youth Reps)」のみが対象となります。

第30回 アドバンスト・スタディーズ・プログラム

APAY主催 第30回アドバンスト・スタディーズ・プログラム(ASP)が2012年11月5日~30日に、香港・ウーカイシャ・ユース・ビルで行われます。ASPは、各Y M C Aにおけるマネジャークラスのスタッフ対象で、今日の現状からのニーズと、各コミュニティーでのY M C Aミッションの達成を目指すものです。

Y M C Aワールド・チャレンジ (Y M C A World Challenge)2012

Y M C Aワールド・チャレンジの目的は、500万人を動員しY M C Aのストーリーを語ることです。あなたのY M C Aワールド・チャレンジの計画を始めて、活動を世界中に広めてください。2012年、ともに歴史をつくりましょう!



マレーシアY M C A、中国Y M C A 新人事

マレーシアY M C A同盟

2012年4月14日の年次総会において、マレーシアY M C A同盟の会長にGeh Cheng Lok氏が再選され、任期が2年間延長されました。また、クアラルンプールY M C Aのアルフレッド・オン氏が新たにマレーシア同盟の名誉主事となりました。Geh氏、オン氏、そしてすべての常務委員の皆様にお祝い申し上げます。

中国Y M C A、役員選挙

中国Y M C A・Y W C Aの合同協議会が2012年4月に行われ、両会の代表の選挙が行われました。Y M C Aの役員は全15人、また平均年齢は50歳です。初の合同協議会

後、新たなリーダーシップが任命されました。新理事長は徐曉鴻(Xu Xiaohong)氏、総主事は涂漢橋(Tu Hanqiao)氏です。

両氏にお祝い申し上げます。

周年を迎えるYMCA シンガポール、スリランカ

110周年を迎えるシンガポールYMCA

シンガポールYMCAは2012年7月20日に感謝会を行います。シンガポールYMCAとAPAY共催のYMCAユース・カンファレンスは7月17日～22日に開催されます。



50周年を迎えるスリランカYMCA同盟

スリランカYMCA同盟がゴールデン・アニバーサリーの50周年を迎えます。さまざまなプログラムが8月10日～14日に予定されています。この記念行事とあわせて、地球市民育成トレーニングが8月7日～12日に開催されます。



発行元
アジア・太平洋YMCA同盟
Asia and Pacific Alliance of YMCAs
23 Waterloo Road, 6th floor, Kowloon, Hong Kong
tel. 852-2780 8347, 2770 3168, 2783 3058; fax 852- 2385 4692
e-mail: office@asiapacificymca.org